

「おたすけ」活動報告
長崎県伊王島での化石採集

都築みのり

平成 28 年、年も明けてすぐの 1 月 22 日のことである。私は大学からの資金援助に飛びついた勢いのまま九州は長崎県にまで来てしまっていた。化石採集の為である。留意願いたい私は化石を自分の研究テーマに掲げているわけでも化石に関する大層な知識を持っているわけでもない。ちょっと化石が好きなズブの素人である。長崎県伊王島には古第三期の地層が思い切り露出している場所があり、理系活動をしろと言われ化石採集でもすることにした私は、ここならばズブの素人でも多少の化石は拾って帰れるだろうと安易に考え、近鉄特急に飛び乗り約束の地長崎へと赴いたのである。

金銭的後ろ盾を得た私は、極楽気分博多まで新幹線に乗ったり特急に乗ったりカツサンドを食べたりとやりたい放題していたわけだが、権利を乱用する姿に神か何か怒ったのであろうか、二日半を予定していた私の研究旅行に暗雲が垂れ込めた。化石採集実施日の 23 日夜、あろうことか九州に大寒波が到来する予報が出た。そもそもなぜ長崎県を選んだかと言えば暖かい、つまり雪などによって採集を妨げられないと考えたから選んだというのにこの有様である。休み明けにはいつも通り学校があるため、日曜には奈良へと帰還する必要があった私は計画の大幅な変更、土曜のうちに本州へととんぼ返りすることを余儀なくされた。踏んだり蹴ったりとはこのことである。その上、化石採集を予定していた時間に潮がまだ引いていないということが事ここに至ってようやく明るみに出た。採集予定地は潮がかなり引いた時でないとは移動できない場所にある。まさか泳いでいくわけにもいきまい。とりあえず大事なことは京都で買うお弁当をどうするかだと呑気に考えていた三時間前の自分を張り倒したい。これはどうやら大変な事が起きているのではという思いに徐々に追いつめられながら、ひとまずは一日目が終わった。

さて二日目である。私は今より長崎港から伊王島へ行き化石を採集した長崎港へ戻らねばならない。許された時間は 4 時間である。我ながらむちゃくちゃである。とまれかくまれホテルの部屋でもだもだしていようと闇雲に自身を追いつめるだけなので、フェリーに乗り船内で買ったファンタをちびちびしながら伊王島へと移動した。この期に及んで初めてのフェリーにわくわくしている辺り呑気が筋金入りである。

さて伊王島である。降り立った港は閑散としておりリゾート施設があるはずだが人影はまばらだった。海の方へ向き直ると航路の途中にあった常緑樹の色が濃いいくつかの小島と今は遠い長崎がぼんやりと見え、雪を降らせるに違いない雲が遠くからゆっくりと空を埋めようとしているのが見えた。フェリーの本数は少ない。私は早速採集場所、千畳敷と呼ばれるそこへ向かうことにした。

港近くの商店の壁にかかっていたいつの物か分からないような地図看板を頼りにとにかく島の上の方へあがってみる。多少の運動をして快い気持ちになったが一向に千畳敷の気配はない。小さな広場のような場所に出ると、源平合戦の折に平家討伐を企てた疑いで島流しの憂き目にあった僧俊寛の墓があったので、わが身の無事を祈り拝んでおいた。そんな姿が物珍しかったらしく島民のおじちゃんに声をかけられたので、千畳敷の場所をたず

ねてみるがこれが私が思っているより随分遠くにあるようだ。そこまで送ろうか、と申し出てくれたのだが流石に気後れしたため遠慮した。この広場のちょうど向かい側に千畳敷があると教えてもらい別れた。確証を得た私は歩き出した。

無事につくはずもなく私は千畳敷目指し道なりに歩いた結果港に逆戻りした。広場から伸びていた道は一本限りで、常に上を目指して歩いたにも関わらず下に帰ってきてしまったのだからもうどうにもならない。まいったなあと思いながら呆然と徐々に音高くなってきた海を眺めていると、目の前に一台のトラックが止まり、見覚えのある人が喋りかけてきた。先ほどのおじちゃんである。やっぱり送っていくから乗って行けという言葉に弓折れ矢尽きた私はやぶれかぶれで頷いた。最悪の場合車のドアを蹴り開けて外に転げ出ればよい。

己の訝りが恥ずかしくなるほどおじちゃんはいいい人であった。ひとまず上がって行けとおじちゃんの家案内され、奥さんから手厚い歓迎を受けた。ちょっとしたお菓子などを頂いて千畳敷入り口とかかれた場所まで送ってもらった。気を付けろと残しておじちゃんは去って行った。笹だのに浸食されている獣道と呼ぶべき道を下っていくと徐々に波の音が耳をかすめるようになり、森が途切れるとそこはロープ無しで移動できるくらいの緩やかな崖で、崖を少し降りたところまで海が迫っていた。目指していた千畳敷がついに目で確認できるところまで来たものの、やはり潮が高い。時間ぎりぎりまで採集を諦めない腹をくくった私は、潮が引くまで崖の斜面に座って待つことにした。自分を鼓舞するために海に向かって大声でいい日旅立ちなど歌った。空はいよいよ暗く、熱唱する私の頬に雨粒がついた。

一時間ほど待ったと思う。目に見えて海面は低くなり、干潮時であるなら歩けるだろう場所も見えてきた。猶予はすぐそこまで迫っており、さてどうしようと思っていた矢先、三度私を呼ぶ声があった。誰だろうおじちゃんと奥さんその人である。どうも私のことが心配でわざわざ来てくれたらしい。崖の上で再開を果たした私たちは、おじちゃんのもう向こうまでいけるだろうという一言をきっかけに、千畳敷にアタックを試みた。

自衛隊上がりだというおじちゃんは崖をすいすいと伝っていく。さすがにそこまでの動きは出来ない私は海面から姿を見せ始めた岩伝いに移動していった。岩から岩へと飛び移る途中で一度足を滑らせたかたに膝横を打ち片足を海水にひたした。おじちゃんに心配されながらそれでも前に進み、ついに千畳敷へと降り立った。

たどり着いた千畳敷を目の前にして、海水に浸され萎えかかった私の心はたちどころに奮起した。こぶし大の石がごろごろと転がっており、情報が正しければそれらの中に化石が紛れ込んでいるはずである。早速目を光らせてみると、貝の群がまとまって化石になったと思われるものがすぐに見つかった。幸先が良い。化石はノジュールと呼ばれる石の塊の中に入っていることがあると覚えていたので、手ごろな石を手に取り準備しておいたタガネと金槌で割ってみる。何もはいついていない。もう一つ割ってみる。やはり何もない。がっかりしたが、ズブの素人にノジュールと普通の石の見分けがつかうわけないだろうと後

から思った。

石を割っても割っても化石は出ず、疲れてしまい雨もひどくなって来たので貝の群れの化石のみを収穫として引き上げることにした。近くで流木を拾っていたおじちゃんに声をかけ、上まで戻ることにしたのだがおじちゃんが下は危ないから上から帰れというので、インディ・ジョーンズさながら大きな岩の割れ目を乗り越えることになった。靴が濡れており危ないため、おじちゃんに靴と靴下を持って貰って裸足で割れ目をのりこえた。寒さの為か武者震いか膝から下が小刻みに揺れ肝を冷やした。今思い返しても身の縮む感がある。割れ目を乗り越えてからはおじちゃんは流木を車に積んでくるとひょいひょい先に行ってしまったため、岩の上で座って待っていてくれた奥さんとゆっくり帰った。

奥さんに体をいたわられながら行きに通った獣道を抜け、道路まで戻ってくるとおじちゃんが待っていて、濡れた服を乾かして行けと言ってくれたので再びおじちゃんの家へ上がらせてもらった。奥さんのスウェットを借りてズボンや靴をドライヤーで乾かしていると奥さんがうどんを振る舞ってくれた。ダシがあんなに身に染みたのはいつ以来であろうか。体が奥から温かくなるようであった。海のおいがするしっかりと乾いた服を身に着け、おじちゃんと奥さんに港まで送ってもらった。またいつか、今度はもっと海の良い時にと約束し、私は伊王島を去った。

ところで化石採集の結果はと言えば、正直なところ大失敗と言って差し支えないであろう。千畳敷で採集したという人の記事などを見ると、私の成果がどれだけ芳しくなかったかがありありと分かる。私がノジュールの見分け方を分かっていなかったというのもあるし、潮が引ききっていなかったというのもある。ところが活動が全くの無意味であったかというところではない。私は本当にちょっとしたものだが化石を持って帰ってこれたし、化石採集に際しどのような冒険があるかを身をもって体験した。そして大変良い出会いをした。今回の活動を通して、今までちょっと楽しそうだな、程度の考えだった化石採集を自分でどこに行くか、どう行くか、何を目標にするかから考え、実行できたのはとても有意義なことだった。次は良く晴れた夏の日にも伊王島を訪れて、おじちゃんと奥さんのところに顔を出そうと思っている。もちろん台風の日にはちゃんと避けるつもりである。